

2022 年の遊戯王怪文書まとめ

宣告者の神巫と女装マスター 1	2
宣告者の神巫と女装マスター 2	5
デカパイコロシム イヴリース 敗北 ver	8
デカパイコロシム イヴリース 勝利 ver	9
アロメルスとレイちゃんホール	10
蟲惑魔論文：フレシアは男でも女でもいくらでも誘い込んで関係持ちちゃうけどマスターだけはしないよでもそれは彼が特別だからだよ	20

宣告者の神巫と女装マスター 1

すっぽりと被るようにして彼女に借りた服を着て、首を通し、ふうと溜息を吐く。

鏡の前に立つと、我ながら案外——男とは思えないほど——悪くない。

(やっぱり髪型も揃えて正解だったかな)

三つ編みのウィッグを撫でた後、ふと気付いてフードをすっぽりと被る。

(これでよし)

自分に付き従う精霊、そして自分の憧れでもあった宣告者の神巫の姿がそこにあった。

鏡の前でぐるりと回ってみたり、彼女のように手を組み祈ってみたりする。

そうしているうちに自分でも動悸が高まるのが感じられる。

分かってる、こんなことのためにこの格好をしたのではない。

机の引き出しに閉まってあった、「あるもの」を取り出した。

それは玩具、それも卑賤で淫猥な目的のための、要はディルドだった。

ただのそれではない。通販サイトで見かけた時に、純白でそれでいて数多の突起に彩られたその醜悪で凶悪な見た目は何故かむしろ安心感を与えてくれた。

それは正に、普段自分が頼りにしている、仮に対戦相手から罵詈雑言を浴びせられることになってもいつも自分を守ってくれている、《崇高なる宣告者》のようだったのだ。

鏡の前に跪き、両手でディルド…いや、宣告者様を持つ。

(いつもありがとうございます)

崇めるように頭の上に掲げ、そしてゆっくりと口付ける。

びくん、と腰が動いた。陰茎の先が滑らかな布地をなぞったのだ。

下着から解放されたそれは既にそそり立ち、神巫の出で立ちを卑しくも持ち上げていた。

(我ながら、こんな神巫なんていないよね…)

そう、こんな神巫なんていない。

清廉な純白の衣の下に男根を忍ばせて、あまつさえそれは裾が持ち上がるほどに痛いほどそそり立っている。

(はしたない…神巫はこんなことしない…!)

思考とは裏腹に、宣告者様に口付け、吸いつき、先に舌を這わせ、十分に唾液をまぶして

いく。

己の崇拜する《崇高なる宣告者》がベタベタに濡れたころには、神巫の出で立ちに出来た山も先走り汁で黒く穢れていた。

顔を上げると、鏡の中には神聖な信仰など欠片も感じられない、欲情した雌が一人いるだけだった。

（ごめんなさい、宣告者様、こんな…）

息を荒げながら尻を持ち上げ、宣告者様を己のアヌスへと宛がおうとする。

（宣告者様のおかげなのに、いつも僕のこと守ってくれてるのに、）

ひとり、と肛門の入口に宣告者の頭頂部が当たると、くひいと軽く声が漏れた。これだけで分かる、イボイボがたくさんついていて、こんなのお尻の中に入れちゃダメだって。

（ダメだよ…宣告者様を、お尻の中に入れるなんて…）

ぐにぐにとねじ込むように押し付けると、自分のアナルが宣告者様へ吸いついていくのが分かる。

（あぁっ、ごめっ）

お腹の下の方に力を入れて、ふうふうと息を吐きながら、ぐっといきむ。

「ごめん、なさいいい…！」

ぐいっと押し込むと、僕の偉大な宣告者様は、穢れたお尻の中へと頭を突っ込んだ。

「がひっ、いいっ、これっ、ぎっ…」

宣告者様のぶつぶつが腸壁をゴリゴリと抉る。痛い、その痛みは、崇拜する宣告者様を緩み切った自分の恥部で啜え込む僕の卑猥さへの罰のようだった。

「ごめんなさいっ！ごめんなさいいい…！」

謝っても宣告者様は許してはくださらない。突起は腸壁を抉り、奥へとかきわけ、かき回す。

「反省しますう！宣告者様を、僕の、汚いお尻の穴に入れて、申し訳ありませんでしたぁあっ…！」

誠心誠意の謝罪と共に、頭を床に擦り付けながらいきむと、宣告者様がごつりと僕のどこかに触れた。

「がっ、ひいっ！？」

丸出しにした尻だけを持ち上げた、宣告者様に失礼極まりない格好をしたまま、ペニスがびくんと跳ね上がった。

「ああっ、そこっ、そこダメですっ！」

さっきまでとは違う、宣告者様の突起が僕のダメなところを刺激する。

痛い、痛くて、気持ちいい。

「はあっ！あ、ありがとう、ございます！」

ご褒美、ご褒美だ。宣告者様が許してくれたんだ。

僕のだらしのないアナルで感じてもいいって仰ってくださってる。

「ありがとう、ございます！宣告者、様あ！伊っても、良い、でしょうかあ、あっ？」

ぐいっ、っと一気に奥にねじ込まれたそれを、僕は宣告者様の恵みと受け取った。

「あああっ、イキますう！宣告者様あ！僕は、アナルでイかせて、いただきますっ…！」

思い切り肛門に力を入れていきむと、宣告者様は僕の奥深くまでいらっしゃってくださった。

「ぎ、ひいっ！いいいい…！」

白い精ががどぷりと噴き出した。

「ありがとうございますっ…ありがとうございます、ます…んう…！」

宣告者様への感謝の言葉に合わせてとめどなく精が溢れ続ける。神巫の服は満遍なく淫らに穢されていった。

「あっ…ありがとうございます、ございましたあ…宣告者、様あ…。んっ…。」

引き抜こうとしても、未練がましく吸い付き続ける僕のアナルがようやくぎゅぽっと宣告者様を離したとき、この日最後の精がどぷりと漏れた。

翌日、洗濯した服を宣告者の神巫に返した時の、彼女の微笑みへの罪悪感から逃れるように盤面の展開に集中する。

そして、今日も僕の崇高なる宣告者は、腕を組んで盤面に仁王立ちしてみせた。

エンゲージを破壊、エリアゼロを破壊、レイを破壊。

最近知り合った閃刀姫のマスターとのネット越しのデュエルは、久々の完勝だった。

「今日もありがとうございます、宣告者様」

ぽつりと呟いた後、僕はどうしても我慢出来ず、傍に置いていた宣告者様のデイルドへちゅっ、と口付けた。

宣告者の神巫と女装マスター 2

同じ服装に身を包んだ二人の少女は部屋で向かい合う。

「ごめん…本当に…」

一人は項垂れていた。

「どうか顔を上げてください、マスター。」

宣告者の神巫は少し困った顔で目の前の少女、いや少女の出で立ちに身を包んだ少年に声をかけた。

崇光なる宣告者に仕える神巫、その彼女が精霊として仕えるもう一人の相手であるマスター。決闘者にしては少々気弱であったがそれ以上に心優しい彼は、深く信頼できる彼女の仕える相手でありながら、同時に身近な間柄の異性として主人以上の目を向けてしまいがちな存在であった。そんな彼から服を貸してほしいと頼まれたときは、神巫は何の疑問も抱いていなかった。彼が必要だと言うのならそういうものなのだ。だが、ついこっそりと部屋を覗いてしまった彼女が見たのは。

「ですが…何故私の服を着て、ご自分を慰めるようなことを…？」

「それはっ、その…」

自分の服に身を包み、ウィッグを着け髪型まで揃えて、自分の分身を扱き、精を吐き出し、そしてあまつさえご自分のお尻の穴まで弄りだすところを彼女はずっと見ていた。いけないという罪悪感、そして彼の痴態を目の当たりにしての己の昂りもあったが、それ以上に彼女は自分でも説明のできない淀んだ感情を抱えていた。神巫の服に身を包み、そしてあの白い梁型…どこか崇光なる宣告者様のお姿を髣髴とさせる淫具。マスターの情欲が向けられていた相手。それは自分ではなく…。

「宣告者様は、そのような淫蕩に溺れた行為はお許しになりません。」

「…っ！」

びくりと身体を強張らせるマスターを、神巫はそっと抱き締めた。

「ごめっ、ごめんなさい…！」

誰へのものなのか、堰を切ったような謝罪の言葉が彼の口からこぼれ、神巫へすがりつく。

胸のうちへ収まる彼を見て、神巫は、胸の奥のどろりとした欲望に身を任せた。

「…宣告者様へそのような思いを向けることが無いように、」

「…神巫？」

彼のそそり立った陰茎に神巫の白い指が添えられると、びくりと服の裾が持ち上がった。

「あっ…。」

「この私が全てを受け止めます、マスター。」

混乱した様子 of マスターに神巫の唇が重なる。

「んむっ！？」

ああ、マスターの唇。いつもの彼の人柄のように暖かい。そして、そんなマスターも薄暗く、淫らな欲望を抱えていたなんて。そう、私と同じように。

ふと脇に目をやると、壁に掛けられた鏡の中では二人の神巫が身体を寄せ合い、唇を重ねていた。

「ふうっ、んっちゅ…。」

同じく横に目をやっていたマスターは、熱に浮かされたかのように神巫の口内へと舌をねじ込む。あんなに優しいマスターが、夢中で私の口内を吸っている。他の誰にもこんなことはしないだろうに。私にだけ。

マスターが神巫の身体を抱き締め、身体を弄る。同じ格好をしていても彼女の身体は自分とは違う。太ももや尻にはこれまでは気付かなかったがふくよかな柔らかさが、胸は自分を受け止めるが、そして花のような爽やかな匂いの奥にはすえた雌の臭いが。

神巫もマスターの身体を丁寧に確かめていく。華奢で女の子と見紛うような少年だと思っていたけれど、腕には、背中には確かな強さとしなやかさが、手のひらで撫でまわす度に伝わってくる。

（やはり、あなたも男性なのですね、マスター…。）

汗の混じった雄の臭いを吸い込んだのを自覚して、身体の疼きをこらえるようにぎゅうっと抱き締める。

あっ、という可愛らしい声とは裏腹に、硬い感触が彼の欲望を示すように神巫の下腹部をこつこつと叩いた。

それに応えるように、マスターの手を己の下腹部に導く。

「これ…。」

「はい…どうかマスター、お互いに邪な思いを淀ませることが無いよう、んっ…！」

くちゅ、と湿った感触とともにマスターの指が神巫の陰唇をかき分ける。彼の分身にそっ

と手を当て、ねとりとした感触を手にまぶしながら、撫で上げていく。

相手の荒くなっていく呼吸を唇で絡め取るようにすると、秘部は素直に悦びを表す。それが嬉しくて、また一層淫猥な奉仕に熱が入る。

「神巫…！」

「はい…っ、一緒に…！」

声にならない息を吐き出して、二人は達していた。神巫は雄の精をどろりと手のひらで受け止め、全く足りずに溢れたもので自分の服を穢させる。マスターはといえば、恥ずかしいほどに溢れた神巫の蜜でびしょ濡れになった指で、愛おしむようにその感触を弄んでいる。

のめり込むように卑猥な余韻を存分に楽しんだ後、二人の神巫は見つめ合い、そして深く口付けをした。

「その、本当にごめん…。」

「もう止めてください、私はマスターを責めたいのではありません。」

ベッドの中、そしてマスターの腕の中で神巫は微笑んだ。

「ですが、宣告者様にあのような思いを向けるのはおやめください。あまつさえ、その、ご自分のお、お尻の穴に無理などさせないよう…。」

「はい！分かってる！分かってます！」

顔を真っ赤にするマスターを受け止めるように抱き締める。

「劣情を抱いてしまうような時には、いつでも全てこの私が受け止めます、マスター。ですから…仮に私が淫蕩に耽るようなことがあれば、代わりに…。」

「…僕で良ければ。」

返答代わりに抱き締め返す彼の熱を感じ、神巫は胸の奥の欲望が満たされていくのを感じていた。

彼女自身も分類が出来ない初めての欲望、それは独占欲という名の信仰とは程遠い女の感情。

絶対的な信仰の相手から強引に男を引き剥がし絡め取るという己の行為を自覚しないまま、神巫はただマスターの暖かさを深く深く堪能していた。

デカパイコロシム イヴリース 敗北 ver

「あらあら、無様に負けちゃってえ」

ライフを削り切れソファに倒れ込んだマスターをイヴリースはニヤニヤと見下ろす。

「わざわざこの私を僕にしてまでまでやりたかったことがそれなのかしら？」

まあ、無様な貴方の姿を眺められたから私はそれでもいいけれど」

ぐうの音も出ないマスターを見て一層歪んだ笑みを浮かべると、彼女は服をすりと落とす。

「それじゃあ、せっかくくたばってるとこだし…このまま好きにさせてもらわ」

普段の服装では伺い知れなかった確かな胸元の膨らみを見て、マスターの股間だけは即座に立ち上がった。

「もう、こっちは素直で可愛らしいんだからあ。よーしよし」

指先で亀頭を撫で回すと右に左に剛直は律義についていく、その様がリースの嗜虐心と征服欲を満たしていった

「ほーら、これ、好きなんでしょう？」

少々強引に作り上げられた谷間に挟まれ、柔らかな感触を味わうようにびくんと跳ね上がる、それを逃がさないようにまた包み上げる。

「いいのよお？素直に気持ち良くなっちゃって、全部吐き出して…」

上目遣いの視線をマスターに向けて送りながら、リースはたっぷりと媚びた声を上げた。

「私のものになってえ？」

小さな呻き声と共に白濁した精が吐き出され、たちまち素肌を汚していく。

「あっは、早すぎでしょ もう、汚いんだからあ…」

侮蔑の言葉を吐きながら胸で包み込むのは止めずに丁寧に性を搾り取っていく

「はいお疲れ様、こんな調子で負けっぱなしだったら…」

耳元に唇を寄せ、囁いた。

「近いうちに私の方がマスターになっちゃいそうねえ」

ちゅっと耳に口付けて、ひらひらと手を振って消えていくイヴリースを見つめながら、後はぐったりとしたマスターだけが残された。

デカパイコロシアム イヴリース 勝利 ver

「あらあ…まさか勝っちゃうなんて」

勝利を飾ったマスターを出迎えたイヴリースはわざとらしく驚いた顔を見せる。

「まあ、この私を手の内に迎えているのだからそれくらいやってもらわないと困るけど…、
って、ちょっとお早速？」

マスターに軽く肩口を押された彼女は、嘲るように笑いながらけれどさして抵抗もせずベッドに倒れ込んだ。

ぐいっと下ろされた服からは意外なほど豊満な胸が零れ落ち、マスターがごくりと唾を飲む。

「もう、今更見たくらいで満足してるんじゃないわよ」

リースは馬乗りになれながらもクスクスと笑う。

「まあ私のマスターに勝利のご褒美は必要よね？」

手を両側に添えて、むにゅっと谷間を作って、媚びた目を向ける。

「私のおっぱい、好きに使ってえ？マスター」

いつの間にかさらけ出されていた剛直をマスターが谷間に突き入れると、眼前に突き付けられたリースはびくりと固まった。

「やっ…ふふっ、興奮しすぎでしょ」

そのままずりずりと擦り付けられながら、主が動きやすいように身体の位置に気を配る。

これではまるで、我ながらマスターに心から尽くす僕のようなだ、とリースは自嘲する。

そんな無様でさえある自分があまり嫌にも思えず、目を閉じて突き入れられたペニスの先に軽く口付けた。

それがトドメになったのか、マスターの精はそのまま迸った。

「あっ…こら、まったく…遠慮なしにこの私の顔にぶちまけちゃって…」

顔面に精を浴びせられながら、リースは特に怒るでもなく従順にそれを受け止める。

「まあ、私の主ならしっかり従えてもらわなくちゃ困るわよね」

目を細めて微笑み、彼に視線を送る。

「それで、もうご満足かしら、マスター？」

問うた傍から全く衰えない陰茎を突き付けられ、リースは苦笑いしながら返事代わりにその先に優しく口付けた。

アロメルスとレイちゃんホール

甘い香りが漂う森の奥深く、2人の少女が歩みを進めていた。

素肌を惜しげもなく晒す赤い髪の少女は鼻歌交じりに嬉しそうに進み、ブロンドの少女はふらふらと覚束ない足取りにぼんやりとした目つきでそれについていく。赤い髪の少女は森の香りをより一層濃厚にしたような甘ったるい香りを振りまき、ブロンドの少女はそれらの甘美な香気を深く、更に深く吸い込み、かすかに、そしてだらしなく微笑んでいた。

森の奥深く、2人が辿り着いた開けた広場のようなところには、一人の青年が座っていた。ここ、蟲惑魔の森に暮らす、蟲惑魔たちからは『お兄ちゃん』と呼ばれる者。森の主であり、蟲惑魔たちの主人であるかもしれないし、或いは森に捕らわれた被害者で、蟲惑魔たちに墮とされた哀れな餌かもしれない。

「お兄ちゃん❤️」

「どうした、アロメルス？ と、その子は…。」

「あ…私は、レイ、です…閃刀姫、のレイ…。」

ぼんやりとしたまま、ぽつりぽつりとブロンドの少女は答えた。

「もう、違うでしょう？」

ぐいぐいと身体を揺さぶられると、レイはゆらゆらと揺れる。

「え…？私は、せん、とうき…列強と、戦う…。」

「ええと、もしかして、アロメルス？」

「そうよ、落とし穴に落ちこちたのを捕まえてきたの…❤️」

アロメルスはレイの肩へと顔を乗せ、にんまりと、どこか嗜虐心を湛えた笑みをお兄ちゃんへ向けながら告げる。

「あなたのための新しい、オ❤️ナ❤️ホール❤️」

ブロンドの少女に対する侮蔑的で下品な宣言を、それが当然のように受け止めありがとうなど優しげに微笑むお兄ちゃん。

それとは対照的に、レイの身体はびくりとひくつき、ぼやけていた眼にわずかに戦士の光が戻った。

「セラが大騒ぎしてたわよ？お兄ちゃんがまた玩具のオナホなんかで処理してたって。」

「そうは言うけどさ、いつも皆に相手してもらおうわけにもいかないわけで…。オナホは別

腹というか…。」

「私は分かってるわよ♥だからこうしてあなたのために良さそうなオナホを…。」

「あ、あの！」

「ん？どうしたのレイ？」

「んう！？ひゃっ…！」

アロメルスの手が腰から尻へと這いまわり、レイは反射的に悲鳴一ほんのりと甘さの混じった可愛らしいものだったが一を上げた。

「ああ、ごめんなさい。ちゃんと紹介してなかったわね。この人が私たちのお兄ちゃんよ。」

「んっ、おに、いさん…？」

身を寄せてきたアロメルスに無造作に尻を揉まれ、荒い息を吐きながら、レイは目の前の青年と自分の関係を認識しようとする。

「アロメルスさんの、お兄さん…ですか？私は、閃刀姫として、あなたたちとは…。」

「違うでしょう、レイ、今はあなたのお兄ちゃんでもあって、」

アロメルスはそっと唇を寄せて耳打ちする。

「蟲惑魔のお、オ♥ナ♥ホール♥こと、レイちゃんの持ち主♥」

「〜〜〜!!!」

びくり、ぞくりと、それは嫌悪感から、期待感や快樂などではなく、あくまでも嫌悪感によるもので、レイは身体を強張らせる。

「レイは落とし穴に落ちてしまったでしょう？そういう子で良さそうな子をたまに見繕ってね、お兄ちゃん用のオナホにしているの♥」

「ちが、私は、国防のために戦う、閃刀っ姫、でえ…、お、オナホ、オナホなんかじゃないですっ…！」

自分のアイデンティティを強く認識し、決してオナホールなどではないと否定しながら、レイはスレンダーな身体をアロメルスの這い回る手から逃げるようにくねらせる。

「そう言われてもねえ…落とし穴に落ちてしまった以上、もうレイは私たちの言いなりだし…。レイはイヤなの？お兄ちゃんのお、オ♥ナ♥ホ♥」

「い、イヤですよ…！だって…オナホって…。」

「そうよ、お兄ちゃんのおちんちん♥を、レイのいやらしーいぐちょぐちょの穴を使ってえ、気持ちよーくしゃ♥せ♥い♥させてあげるの♥素敵なお仕事でしょ♥」

「っ…。」

アロメルスの囁きを聞きながらもじもじと動くレイの身体は、最早逃げようとしているのか彼女の手を追い求めているのか、傍から見ては分からなくなっていた。荒く深い息を吐き、頭の中を甘い香りで満たしていきながら、レイは目の前の青年を見つめては目を逸らしを繰り返す。

（私、お…オナホ、になるの…？この人の…？どうして、オナホなんかに…。）

オナホ、オナホとレイの頭の中に言葉を浮かべる度、頭の中がどろりと甘く溶けていくようだ。身体の芯がじゅくじゅくと疼いていく。どうにも収まりがつかない。アロメルスの手の感触が感じられず、思わず腰を揺らして探す。自分の落ち着く居場所を探しているような…。

「で、でもっ、私！」

居場所、レイの脳裏に戦場で閃刀を振るうときのような鋭い感覚がわずかに戻った。

「みんな、皆のために戦わないといけないんですっ！だからあなたのオナホっ…になっちゃうのはっ…その、少し困る、んです…。」

「…それなら、一回オナホになってみてから皆のところに帰ればいいんじゃないかしら？」

「えっ…？」

「何も死ぬまで鬨ってあげるなんて言ってないわよお♥これまでの子だってお兄ちゃんが満足したらちゃんと帰してあげてるんだから♥レイだって、ちょーっとだけならオナホになってみたっていいと思わない…？♥」

「そ…それはっ…。」

アロメルスの突飛で、レイの立場や尊厳など彼方に放り捨てた発言は、だがすっかり蟲惑魔の森の香気にまるでジャムのように甘く甘く煮詰められたレイの脳裏にとっては、アロメルスの、眼前の青年の、そしてレイ自身の皆が幸せになれる断る理由の見当たらない選択肢に思っていた。

「えいっ♥」

「わっ！」

レイの尻を愛撫していたアロメルスの手が、トンと彼女の腰を押し出した。つんのめるように前に踏み出したレイは、青年に受け止められた。

「あっ……。」

ふっと彼の香りが鼻先を撫でた時、レイはすとんと、驚くほどすっきりと自分の心と身体が落ち着いたのが分かった。ああ、ここだ。ここが私の居場所、私の役目、私の意味…。

「アロメルスも言ってた通り、少しだけってことで…どうかな、レイちゃん？」

少し申し訳なさそうな顔を見て、彼を安心させようとレイは笑った。

「ずっと、は無理ですけど…、仲間のところに帰らないといけないんですけど…、少しだけ、なら…」

彼の手の熱を確かめるようにをぎゅっと握り返す。じんわりと手から腕へ、身体へ熱が伝わっていく。

「私、お兄さん♥の、オナホール♥になってもいいです…♥」

手をくいと軽く引っ張られ、レイは返答代わりにお兄さんの胸へと飛び込んだ。ぎゅっと抱き締められ、胸いっぱいにお兄さんの匂いを吸い込む。

「〜〜っ♥♥♥」

私のお兄さんの匂い、私の持ち主の匂い、私を使う雄の臭い、頭の中に染み渡っていく。

「はぁー…♥お兄さんの匂い、落ち着きます…♥」

頭を撫でられると、レイはすんすんと鼻を鳴らし、隠そうともせずに匂いを堪能する。

「仲間が待ってるのに、無理を言ってごめんね、レイちゃん。」

「そんなん♥私こそ、お兄さんのオナホなのに…♥我儘を言ってしまっでごめんなさい…。」

すりすりとお兄さんに纏わりつくように体勢を変えていく。オナホの仕事をこなすために、レイの『穴』を使ってもらえるように…。

「私もお兄さん♥のオナホがとっても大事な役目のは分かってるんです…。お兄さんにたくさん♥たくさん♥私で気持ちよーくなってほしいんです♥でも、どうしても、私には待っている大事な仲間がいるから…。」

彼女が苛烈な戦いへ身を投じ続ける誇り高い理由を口にしながら、レイはお兄さんに跨り、身体をくねらせ、彼の股間へとぴったりと自分の腰を寄せる。眼前のお兄さんと視線を交わすと、刹那もこらえることが出来ずにレイの表情はだらしなく崩れた。

「だから♥ちょっとだけ♥ちょっとだけになっちゃいますけど♥私、お兄さんのオナホになりますねっ…♥」

「よーく言えました♥レイ♥」

頭を撫でてくるアロメルスに、えへへとはにかんで応える。

「それじゃあ早速…。」

「やっ♥ああんっ♥」

スカートの中へ潜り込み、内股を弄るお兄さんの手に、レイは声を抑えようともせずに応してみせる。下着に指がかかったのが分かったら、準備が悪くてごめんなさい、ちょっと待ってくださいねと一度立ち上がり、右足、左足と下着から抜いていく。

「あはは…♥はしたくないですね…♥」

その動作だけでべちゃべちゃと水音を立てる下着を主に見せつけて、恥ずかしそうに、そしてその羞恥心を更なる快楽に換えてレイは笑みを浮かべる。

「女の子ならそうかもしれないけど、オナホが最初から穴が使いやすいのはいいことよ♥」アロメルスに囁かれ、より一層蜜壺がじわりと湿るのを感じる。

「そうなんですね♥お兄さん♥私、いいオナホ、でしょうか？♥」

脚を開いて、ひくひくと蠢き愛液が糸を渡す自分の秘部を見せつけて、レイは主の褒め言葉を求めて媚びた笑みを向けた。返事代わりに、お兄さんの肉棒が自分の穴の入り口へあてがわれる。レイはゴクリと喉を鳴らした。ふーっ、ふーっという荒い呼吸を、自分の持ち主と合わせるように継いでいき。

「~~~~！♥！♥！♥！♥」

ずぶりと身体の芯を貫かれるような感覚、チカチカと脳が疼いた後で、レイはお兄さんのペニスが自分の中に挿入されたことを自覚した。

「あゝ あっ♥いっ♥いっ♥すっ♥ごいい♥お♥兄さん♥おゝっ♥これっ♥いい♥ですっ♥♥♥」

太く熱い杭が身体に通されたような感覚を味わい、快楽に飲まれ、早々に何度も絶頂に達しながらも、レイは自分が鍛え上げてきた強靱な精神力をフルに活用し、お兄さんの分身を全身できつく、優しく包み上げ、そして扱き上げることに集中していた。お兄さんがストロークを繰り返す度、脳から、心臓から、子宮から、自分の身体のあらゆるところが蜜のように溶けていく感覚、そしてそれらはレイの秘部から愛液として垂れ流され、ぐちょぐちょといやらしい音を立てている。

（すっ♥ごおい♥私のっ♥あなっ♥べちゃ♥べちゃだあ♥やらしいっ♥これ♥なら♥と一っでも♥高♥性♥能♥オナホ♥ですね♥）

すらりと伸びた脚をがっちりとお兄さんの腰へ絡め、腰を振り、ぱちゅんぱちゅんとはしたくない抽送音を森に響かせる。

（私♥がっ♥一番のっ♥蟲惑魔のお♥オナホ♥誰よりっ♥もお♥お♥兄さん♥のおちんちん♥をおゝっ♥気持ちよくするっ♥オ♥ナ♥ホ♥ですっ♥♥♥）

「…あんまりオナホに夢中だと妬けちゃうわね…♥」

隣で眺めていたアロメルスが、おもむろにお兄さんと口づけを交わす。

「あっ？♥あ、あっ！♥」

「んっ♥ちゅ、ちゅるっ…♥精液は、そのオナホに吐き捨てていいから♥キスは私とね、お♥兄♥ちゃん…♥」

「ずっ♥ずるいですっ♥アロメルスさん♥私もっ♥私もお兄さんとキスっ♥キスしますっ♥」

「ぢゅる♥んぢゅっ、ぢゅっ♥ええ？れ、ろお…♥オナホがキスをせがむのは、ちょっとおかしいんじゃないかしら…？♥ちゅっ…♥」

見せつけるようにお兄さんの唇にむしゃぶりつきながらのアロメルスの挑発的な微笑み、レイはかっとな熱が頭に上るのを感じた。

「口もっ！♥口だって私の穴ですっ！♥だからっ！♥私の口も♥お兄さんのオナホ♥なんです！♥だから♥私の穴にい♥お兄さんの舌あ♥ねじ込んで♥ぐちょぐちょって♥してください♥」

「ちゅっ…♥もう…レイがそんなに熱心なオナホになるなら、今日は譲ってあげる♥」アロメルスが名残惜しそうに唇を離すと、割り込むようにレイがお兄さんの唇にむしゃぶりつく。

「んんっ♥あっむう♥ぢゅっ♥るる♥ぶっ♥ぢゅう♥♥」

むしゃぶりつきながらも、絡みつけた脚を離さず、お兄さんを射精に導き続けるのは忘れない。私はお兄さんのオナホなのだから、あくまでもそのため、お兄さんに気持ちよく射精してもらうために全ての神経を注ぐ。

「ぐっ、い、くよ、レイちゃん…！」

「はっ♥はいっ♥お♥兄♥さん♥のお♥お好きな時に、ど♥う♥ぞお♥」

より一層グライドの速度を上げ、レイはスパートをかける。最後の瞬間まで、いや最後の瞬間こそ持ち主が最高の快楽を得られるように――。

「ぐっ、う、ああっ！」

「〜〜っっ♥！！♥！！♥！！♥♥♥♥」

身体の中で弾けるような感覚、膣内に熱い熱が無遠慮にぶちまけられるのを確かに感じながら、レイはもう何回目かも分からない絶頂を迎えた。

「おっ…♥お、おっ…♥ま、まだっ♥い、ぐッ…♥」

意識が飛びかけながらも、奉仕すべき肉棒を優しく扱き上げることだけは忘れてはならないと、レイは腰をグラインドさせ続けていた。己の身体の中に精液がじっとりと広がる感覚と、自分がオナホの役割をこなせた達成感とからまた絶頂に達し、それでもなお自分の肉体でお兄さんが気持ちよくなれるように尽くすことだけは忘れてはいけない。いや、もう私の身体はそんなことを考えなくても、無意識でもお兄さんのおちんちんに奉仕できるように仕上がったのかも――

「…っ♪」

そんな思考に至った時、レイはこの日最後の絶頂を迎えた。

「……これで、綺麗になったかしら？あとはそこの道沿いに歩いていけば森から出られるわよ。」

「……今日の屈辱は忘れませんからね…。」

蟲惑魔の香りの効果も抜けつつあり、抵抗はできないまでも、レイはほぼほぼ正気を取り戻していた。

「次に会った時は敵同士です、アロメルスさん。覚悟を決めておいてください。」

「へえ…あなたこそ次に落とし穴に落ちちゃったら…」

アロメルスの顔ににやりと笑みが浮かぶ。

「今度は死ぬまで精液まみれのオナホかもねえ♥」

「〜〜！！！」

かぁっと顔を真っ赤にすると、これ以上レイは好戦的な台詞は言わなかった。

「それではさようなら、アロメルスさん、蟲惑魔のマスターさん。」

すっかり戦士としての所作を取り戻し、背筋を伸ばしてレイは森の外へ向けて歩いて行く。

「帰りは気を付けてね、レイちゃん。」

「…！」

背中にお兄さんから声を掛けられ、レイはぴたりと歩みを止めた。もう身体が無意識に反応してしまうのか、いや、これは私の意志で…。

「その…。」

振り返りながら、お兄さんと目を合わせ、レイはぎゅっと胸を抑えた。

(少しだけ、今日だけは、私は……だから…、まだ…。)

「今日は、お、オナホの私を、優しく扱ってくれて、ありがとうございます。お兄さん…っ♥」

ぺこりと頭を下げると、レイは全力で駆け出した。気恥ずかしさを誤魔化すためか、誤魔化したかったのは身体の熱か、或いはあれ以上あの場で、彼と目を合わせていたら…。

「——っ!!!」

レイはぐんぐんと速度を上げて駆けていく。

「…大丈夫かな、あの子。」

「おちんちん突っ込んでから心配してどうするのよ。」

「いやまあ、それはそうなんだけど。」

んーと思案を浮かべながらアロメルスは続ける。

「蟲惑の香りはもう抜けているから精神的には正常よ。身体にだって影響は残らない。ただ…。」

「ただ？」

「普段の子ならもっとぼんやりとしているでしょう？でもあの子は自分の意志があるのに、随分と楽しんでいたから。」

アロメルスはくっくつと軽く笑いを漏らす。

「私の香りなんて関係なく、ただ単にあの子が『ハマって』しまったのだとしたら、私にもあなたにもどうしようもないわねえ。」

そんなことより、とアロメルスは彼のお兄ちゃんを覗き込むように顔を近づける。

「随分と盛り上がっていたわねえ、オナホ相手に。」

「…私は分かってるって言ってなかったっけ？」

「あの子の匂い、付きすぎよ。このままだと、私はともかくフレシアたちの機嫌はこんなもので済むかしらねえ…。」

バツが悪そうに眼を逸らすお兄ちゃんの肩に手を置いて、アロメルスの口角が裂けるように上がる。

「上書きしてあげるわよ…♥」

口を開け、これ見よがしに鋭い歯を見せつけると、アロメルスはお兄ちゃんの首筋へと囁

み付いた。

「痛っ…！」

「ん…ちゅっ…❤️調子に乗りすぎると、痕くらいじゃ済まないわよ、お兄ちゃん❤️」
血液交じりの唾液ごとべろりと唇を舐めると、アロメルスはわずかな服もはらりと脱ぎ落とした。

その日から数日後――

同じ広場で青年はため息を吐いていた。

結局他の蟲惑魔たちまで加わってきた挙句、その営みは一日や二日では済まなかった。もう身体がこれ以上はもたない。彼女たちに見つかったら今日も――。

ふと、足音が聞こえて、彼はそちらに目をやった。

歩いてくるのは、数日前に同じ道を駆けていった閃刀姫、レイであった。

またアロメルスの毒牙にかかったのか、しかし今日の彼女の足取りは確かだ。では戦いにも来たのか…。

「こんにちは、蟲惑魔のマスターさん。」

「いらっしゃい、レイちゃん。」

凜とはしていたが、敵意の感じられない声で挨拶を終えると、彼の声を聞いたレイは頬を赤く染めた。

「もしかして、また落とし穴に…？」

「二度とあんなものには引っかかりませんよ！あんな見え透いた罠！」

反論もできずに苦笑いしていると、釣られてレイも笑った。

「それで、今日はどうしたの？」

「ええと、用というわけではないのですが…。」

視線を交わすと、逃げるように逸らし、かと思えば名残惜しむようにまた彼の目線を追う。

彼女の所作は数日前のものとは明らかに違っていた。

一步、一步と足を進め、レイは彼の前に立っていた。

「その、あれから随分経ったので…。」

数日を随分というかは難しいが、少なくとも彼女にとっては長い時間だったようだ。

「困って、いませんか…？」

頬を染めたレイの視線に込められた意味を、彼は十分に読み取った。

「…確かに、欲しいかなあ…。」

一息ついたあと、彼女の眼を真っすぐに見つめて

「オナホール。」

「……っ♥」

明け透けな雄の下品な欲求を真正面から浴びて、レイは腕を抱いて身をすくめ、だが立ち去りも目を逸らしもしなかった。

「もうっ…それなら、ええ、それならしょうがないですね。」

綺麗なブロンドの髪をかき上げ、彼女は微笑む。

「少しだけ、なら、また私がオナホールになってあげますね、お兄さん♥」

そんな彼女の淫靡な表情は、すっかり蠱惑の二文字が相応しい雌のそれと化していた。

蟲惑魔論文：フレシアは男でも女でもいくらでも誘い込んで関係持ちちゃうけどマスタ

一とだけはしないよでもそれは彼が特別だからだよ

「もう、焦りすぎよ？逃げたりしないから。」

森をかき分ける騒々しい音と、聞き慣れた美しい声が近付いてくる。

「もう少し、もう少しで落ち着ける場所だから、そこまで行ったら…ね♥」

いかにもフィールドワーク向けといった格好に身を包んだ青年が荒い息を弾ませ姿を見せる。

そして彼を先導するのは、逆にこの深い森には似つかわしくない軽装で、素肌を露わにする少女。彼女の名前はフレシア。私と彼女の付き合いは長いけれど、何故その名前を名乗っているのかは聞いたことが無い。

青年は私を見ると随分と驚いた表情を見せた。

「…に、人間？なんでこんなところに…！？」

「お兄さん、その人は大丈夫だから。そんなことより早くこっち…」

太い木に手を付いて、フレシアは小さなお尻を軽く揺らしてみせる。ふわりと漂う濃密な甘ったるい匂いが、青年をフレシアへと強烈に引き戻す。わずかな布からのぞく傷一つない白く綺麗な肌に、彼はごくりと喉を鳴らした。

青年は慌ただしく己の分身をさらけ出すと、フレシアの突き出した尻へとあてがう。未知の存在への警戒心か、わずかにためらいの気持ちが残っていたようだが、

「早くう…お兄さん♥」

フレシアの声がそんなブレーキをたやすく霧散させた。

「ふ、フレシア！行くよ…！」

「あぁんっ♥おっき、い…！」

待ちかねていたかのように濡れそぼっていたフレシアの秘部はばちゅんばちゅんと音を立てて彼のものを受け入れている。ゆらゆらとゆらめく腰つきは、より深く深く雄を誘い受け入れるように。

そんな痴態を見ながら、私はいつものように陰茎を扱っていた。

「もっと、お兄さん、もっと…！」

熱っぽく青年の愛をねだるフレシアがちらりとこちらに視線をくれた。淫猥な表情と抑えもしない嬌声の合間に、確かにくすりと自分に笑みが向けられた。

それだけで扱っていたペニスがびくりと跳ね上がる。

「こ、このっ！そうやって私を誘って…！」

「あはっ♥やだあ、おじさま私そんなつもりじゃ…♥」

年配で少々ふくよかな研究者がフレシアを地面へ押し倒す。彼女の身体は彼の太柄な身体にほとんど隠れるように覆いつくされていた。

「おらっ！この私を馬鹿にしがたって！うっ、もっと締め付けろっ！！」

「んっおお♥はい♥おじさま、すごおい♥」

遠慮など全く無く乱暴に腰を打ち込まれているにも関わらず、フレシアは己の脚を彼の腰へしっかりと絡め、彼の抽送を誘っている。彼女の方が逃がさないとでも言いたげに。

「お前は私のものだっ！この森から連れて帰って一生飼ってやる…うっ、出るぞ！」

「はあいつ♥おじさまのものになりますっ♥だから、あんっ、来て、えっ…！」

彼の乱暴な腰使いが収まり、フレシアはびくりと腰を反応させながらびったりと自らの秘部で啜え込んだままでいた。

性交は終わったにも関わらず、唾液の音を響かせながら二人は舌を絡め合っている。そうこうしているうちにもぞもぞと腰が蠢き始め、営みを再開させようかという様子だった。そんな二人を見ながら、私はいつものように陰茎を扱っていた。

「ちょっと！フレシアちゃん！そこは…！」

「うふふ♥お姉さん、すこーし臭いきついかもしれないわね♥」

美女、と言って差し支えない女性研究者のパンツを器用に脱がせ、股間にフレシアが顔を埋めている。振りほどけずにいるのはフレシアの力が見た目からは想像できないほど強いのか、はたまた研究者にその意思が足りないのか。

「私はこれくらいの方が好きよ♥んー、ちゅっ♥」

「んっ！ダメっ…なんで、そんなっ、上手いの…！」

水音をわざと響かせているかのようにしながらフレシアの口淫で、たちまち女性は腰をくねらせるばかりになってしまった。この場に連れてこられた時の好奇心に溢れ、それでいて警戒心を絶やさなかった凜々しい顔つきはすっかり蕩けきっている。

「まずは一回、イかせてあげるわね、お姉さん♥」

「いっ、ダメッダメダメえ、あっ♥おっ、おおっ♥い、いぐっ♥」

微笑んだフレシアが慣れた手つきで指でかきまわしてやると、女性は派手に腰を震わせあっけなく達したようだった。溢れた愛液がばしゃばしゃと地面を汚す。

へたり込んだ彼女の眼前に立ったフレシアが、笑みを浮かべながら自分の秘部を晒す。

「今度はお姉さんにもしてほしいわ…♥」

「…♥あ、むっ♥じゅるっ♥」

フレシアの淫猥な秘部に女性ははしたなくむしゃぶりついていく。知性など感じられない、まるで獣のように。

そんな二人を見ながら、私はいつものように陰茎を扱っていた。

「来て、来てえ♥」

「フレシア…行くぞ…っ！おっ！」

筋肉質の大男に抱え上げられ、木に抑えつけられたまま、フレシアは彼の精を受け止める。雑に木の幹に押し付けられながら、彼女はうっとりとして精液の感触を味わっていた。

「……ちゃんと気持ちよくなれたかしら？」

「ああ、そりゃもちろん……フレシア？」

彼女が話しかけていたのは彼にではなかった。

微笑みながら視線を向けていたのは私、そして私ほど言えば地面に大量の白濁液をぶちまけていた。

「…ずいぶん良かったのね、何よりだわ。」

「フレシア？そういえば彼はいった——」

瞬間、男の身体が消える。地面に開いた穴に飲まれたのだ。ぎゃっ、と短い悲鳴に続いて骨が碎ける鈍い音が響いた。

「餌も手に入ったし食事にするわ。後片付けはお願いね。」

「ああ、分かってる…。」

私はといえば自慰で達した余韻がまだ抜けず、荒い息を吐いていた。

「ふふっ、本当に好きなのね、これ。」

下半身を晒したままの私の前にしゃがんで、フレシアは私の頬に触れた。

「いくらでも見せてあげるわ、マスターになら。ずーっと、見せるだけ、よ❤️」

眼前のフレシアの微笑みを受け止めて、萎え切っていたはずの私の陰茎はぴんと跳ね上がり、そんな私を見てフレシアの顔が歪む。

嗜虐心と独占欲、そして淫猥な雰囲気を含ませた、まさに「蠱惑」の二文字に相応しい彼女のその表情は他でもない彼だけが見られるものだった。